

## 岸本英夫のたたかい

## はじめに

筆者が岸本英夫の名を初めて知ったのは、池辺義教著『医の哲学』<sup>1</sup>においてであったが、その書名にひかれ、文庫本『死を見つめる心』<sup>2</sup>を買い求め、勤め帰りの電車の中であったように記憶するが、それを読み出した時の強い衝撃は今もって忘れられない。読み始めるや戦慄が走るのを覚えた。死について書かれたもので、これほどまでに赤裸々に述べられたものを他に知らないのである。初めて「肉声」を、「生声」を聞いた思いがした。ここにはまきれもなく、「わが生死観」がある。言うなれば手造りの生死観である。観念による粉飾がなく、まこと平易な文章で書かれている。そして、そこを冷静な情熱とでも言いうるものがしっかりと流れているのである。

疲れた身であったように思うが、筆者の心はまもなくその文体に没入してゆき、夏も近い満員電車の中で、一人異質で、冷たく孤独な時間の中で体を流れるのを感じていた。

現在は、死が徐々にタブーでなくなりつつあり、死に関する書物が次々と出版されるようになった。タイトルに「死」という文字が入っていれば本が売れるというような時代がやってきたのである。これまでの時代の雰囲気への反発という面もあるう、死についての落ち着い

た関心が芽生えるまでにはなおしばらく時間がかかりそうである。

それらの中ではしばしば岸本の名前が挙げられ、その著書が引用されている。「死を見つめる心」はこの種の領域ですべてに特別な位置を占めている。早くも現代の古典といった地位にあるように思えるのである。たとえば最近手にした精神科医中沢正夫著『「死」の育て方』のエピローグにおいても、中村真一郎編『死を考える』の感想という形で、ややくだけた言い方ながら次のような高い評価が与えられている。

「・・・死についての成書―それも死一般を論じたものは、読むほどにいぶかしく見える。嘘っぽくみえてきて困った。・・・

もちろん読めば必ず八〇パーセントの安心が得られる（二〇パーセントはしらすらしいと内なる天邪鬼がベロを出す）。それはキツパリと短い文で首尾一貫しているからである。・・・そのうえ、偉人・天才の言葉として語られるというシカケになっている。たとえば、前出の中村真一郎編の『死を考える』をみると、プラトン、マルクス・アウレリウス、モンテーニュ、リルケ、ネルヴァル、ブルースト、孔子、ラーマクリシュナ、道元・・・堂々のラインアップである。どうだ、まいったかという感じである。・・・病める身で迫りくる自分の死をみつめている二つの文（漱石、岸本英夫）がこの

大町 公

本の最後に載っていないければ、私の天邪鬼は五十パーセントを超えてしまっただろう。」

しかし、なにゆえ岸本の『死を見つめる心』は高く評価されなければならぬのか。「病める身で迫りくる自分の死をみつめ」つつ書かれたからか。それだけの理由からなのか。その他にどのような理由が考えられるのか。もう五年も前のことになるが、初めての出会いの衝撃を思い起しながら、その考えをたどってみることにしよう。

### 一、岸本英夫

よく知られているように、宗教学者岸本英夫（一九〇三—一九六四）は東京大学在職中、スタンフォード大学客員教授として米国にいった時、ガンの告知を受けた。米国においてすら、患者にガンを告知するのはきわめて稀な時代であった。左頸部にできた黒色腫（メラノーム）という皮膚のガン、しかも進行の早い悪性のもので、彼はあと六カ月の命と宣告されたのである。昭和二十九年（一九五四年）、岸本英夫五十一歳の秋のことであった。

幸いにも彼はその後約十年間生き延び、昭和三十九年逝去。闘病生活の間に書かれたものを中心に、彼の死後まもなく『死を見つめる心—ガンとたたかった十年間—』と題されて出版された。巻末に、この年「毎日出版文化賞受賞」とあり、本書には少なからぬ反響がもたらされたのであろうが、この年はちょうど東京オリンピックが開催され、日本国中が沸き返った年でもあり、著しいコントラストを示している。次に『死を見つめる心』の目次を掲げる。

#### 序にかえて

#### I 死に出逢う心がまえ

#### わが生死観

#### 別れのとき

増谷文雄

#### 私の心の宗教

#### II 癌とのたたかい

アメリカで癌とたたかう

癌の再発とたたかいつつ

命ある限りゆたかに

#### III 現代人の生死観

生死観四態

死

現代人の生死観

人間と宗教

続いて、以上の論文を執筆年代順に並べ変えるところなる。

昭和二十三年（四十五歳）

生死観四態（『宗教現象の諸相』収録）

昭和二十九年（五十一歳）

九月、ガンを告知される

昭和三十年（五十二歳）

人間と宗教（『人間と宗教』所載）

昭和三十三年（五十五歳）

アメリカで癌とたたかう（九月、『文芸春秋』十月号掲載）

昭和三十五年（五十七歳）

死（『毎日宗教講座』所載）

昭和三十六年（五十八歳）

現代人の生死観（六月、『総合文化』七月号掲載）

昭和三十七年（五十九歳）

別れのとき（七月、NHKのテレビ放送）  
癌の再発とたたかいつつ（二月、『婦人公論』三月号掲載）

私の心の宗教（七月、NHKラジオ「人生読本」で放送）  
昭和三十八年（六十歳）

命ある限りゆたかに（二月、朝日新聞所載）

わが生死観（十月、「理想」十一月号掲載）

昭和三十九年（六十一歳）

一月、逝去

## 二、「生命飢餓状態」

岸本の旧友増谷文雄によって書かれた「序にかえて」には、「その送葬にあたっては、密葬において、本文のなかの『別れるとき』からの抜粋が朗読せられ、また、本葬においては、『わが生死観』の別刷が会葬者に配布せられた。」とある。筆者もその二つの論文がこの本の核をなすと思う。では、書かれた順序は逆になるが、「わが生死観」の方から見えてゆくことにしよう。これには「生命飢餓状態に身をおいて」なる副題が付けられている。

ここに言う「生命飢餓状態」とは、ガンを告知されて以降の自らの状態をそう言っているのだが、「腹の底から突きあげてくるような生命に対する執着や、心臓をまで凍らせてしまいかと思われる死の脅威におびやかされて、いてもたってもいられない状態」と表現している。「生命飢餓感」は、食に対する生理的飢餓感に酷似している。満腹の時に飢餓感を感じないのと同様、死を考えない人、いつまでも生きていられると考えている人に「生命飢餓感」はない。人間がこのような「生命飢餓状態」に陥るのは、たとえば、戦場に行くとか、病気になるとか、自分の生存を続けて行く見通しが断ち切られる場合、すなわち生存の見通しが絶望となる場合である。この時、生命欲が、生命に対する激しい執着と死に対する恐怖となって、猛然と頭をもたげている。

「生命飢餓状態」に身を置いてみると、生死観には二つの立場があることがわかる。第一の場合は、「自分自身にとつての問題はしばらく別として、人間一般の死の問題について考えようとする立場」であり、言わば「一般的かつ観念的な生死観」である。他方は、「自分自身の心が、生命飢餓状態に置かれている場合の生死観」、つまり「ギリギリの死の巖頭にたつて、必死でつかもつとする自分の生死観」（傍点筆者）である。「生命飢餓状態」に置かれた人間が、「観念的な生死観」に求めるものは、「何か、この直接的なはげしい死の脅威の攻勢に対して、抵抗するための力になるようなものがありはしないか」ということである。そして、それに役立たないような考え方や観念の組立は、すべて「無用の長物」と断じている。

「生命飢餓状態」に置かれると、平生、漠然と「死の恐怖」と考えているものには、「二つの異なった要素」が含まれている。その一つは、「死にいたる人間の肉体の苦痛」であり、もうひとつは「生命が断ちきられるということ、すなわち、死そのものに対するおそれ」である。両者は死に行く者に、時間的に同時に襲ってくるので混同されがちだが、質的には全く異なっている。後者の方がはるかに大きい恐怖である。岸本は死のより中心的な問題として、生命を断たれることへの恐怖という問題に焦点を当てる。

この恐怖は何に基づいているのか。「人間にとつて何より恐ろしいのは、死によって、今持っている『この自分』の意識が、なくなってしまうということ」である。「死の問題をつきつめて考えていって、それが『この、今、意識している自分』が消滅することを意味するのだと気がついた時に、人間は、愕然とする。」ガンを患って以後、岸本の死への対応で著しい特徴を示すものは、この死に対する強い、強い恐怖であろう。彼はこう続けている、「これは恐ろしい。何よりも恐ろしいことである。身の毛がよだつほどおそろしい。」と。「身の

毛がよだつ」という表現を彼は他の論文でも繰り返し用いている。彼にとって死の恐ろしさはこの言葉以外では表現することが不可能であった。それほど彼自身の恐怖に密着した言葉であり、またおよそ言語で表現しうる最大限の恐怖ということでもあったろう。

岸本はすぐれた宗教学者であり、自ら「いろいろの宗教のおしえについては、表も裏もしているつもりである。」と述べている。にもかかわらず（と言うべきなのかどうか筆者にはわからないが）、死後の生命の存続も、死後の理想世界としての天国や浄土の存在もまったく信じていなかった。そのような考え方は、「私の心の中にある合理性が納得しない。」<sup>10</sup>肉体の死によって、「私という意識する個体」は、物質的にも、精神的にも、解消するものと考ええる。考えているというよりも、むしろ「私の近代的な知性が、私をして、そう考えさせずにはおかない」のである。

死後の生命の存続という信念を持たない岸本は、「素手で死の前にたっているようなもの」であった。彼にとって、死は、死後の世界とは「まったく大きな暗闇」であった。

他方、日常生活においては、彼は以後「がむしゃらに」活動した。「人の二倍、三倍も」働いた。友人増谷は、「はからずも、ガンを得て、常時死と対面してあらねばならぬ状況下におかれた彼のそれからの生き方は、まったく刮目して見るに値するものであった。彼はけっしてくずおれなかった。冷静に死を見詰めながら、毅然として、また猛然として生きはじめた。」と書く。その岸本を支えていたのは、「内心のたたかい」であった。「私の内心はつねに死の恐怖に対するはげしいたたかいであった。」<sup>11</sup>あるいは、「私の内心は、絶え間ない血みどろのたたかいの連続であった。」と彼も隠してはいない。

しかし、ガンに冒されてすでに七年もたった頃であろうか、彼の心に大きな「転機」が訪れるのである。

「私は、その絶望的な暗闇を、必死な気持ちで凝視しつづけた。そうしているうちに、私は、一つのことを気がつきはじめた。それは死というものは、実体ではないということである。死を実体と考えるのは人間の錯覚である。死というものは、そのものが実体ではなくて、実体である生命がない場所であるというだけのことである。そういうことが、理解されてきた。」<sup>12</sup>

しかも、「死の暗闇が実体でないということとは、理解は、何でもないうようにあるが、実は私には大発見であった。」（傍点筆者）と付け足すのである。

死は実体ではない。死とは実体である生命がなくなるということにほかならない。この「発見」は、死は生命に対する「別れのとき」という考えに導くと同時に、彼を「生命の絶対的な肯定論者」にしたのである。岸本の十年にわたる「たたかい」の中で最も重大な変化であろう。

岸本は、「生命飢餓状態に身をおきながら、生命の肯定をその出発点とする。私は、ここまで論じて、ようやく、その出発点まで来た。しかし、私はもはやこの稿を終らなければならない。いかにしてよく生きてゆくか、いかにして、「別れのとき」である死に処するか、このような問題をすべてあとに残して、しばらく筆をおく。」と絶筆「わが生死観」を結んでいるが、その答えの大筋はこの約二年前に書かれた「別れのとき」の中にあると考えてよからう。

### 三、「別れのとき」

舞台を「死に出逢う心構え」という副題のついた「別れのとき」に移す。まず、死に対するこれまでの見方を次のように反省する。

「死後の世界や、自分の肉体を離れた靈魂の存在を信じないとなると、死というものは無に近くなる。この自分が、なくなってしまう

こと以外ではない。しかも、この点に、私は、いちばん、ひっかか  
るのである。私にとっては、自分が無になってしまふということは、  
考えただけでも、身の毛のよだつ思いがする。私は、死というもの  
を、この角度からのみとらえて考えようとしたが、それは、私にとっ  
て、何ともいえず、おそろしいものであった。」

死とは「自分が無になってしまふ」ということである。それは「考  
えただけでも、身の毛のよだつ思いがする」。この恐怖のゆえに、彼  
は長く死を「この角度からのみとらえて考えようとし」てきた。しか  
し徐々に疑問がわいてきたのであろう。

「私は、七年間、執拗にくりかえされる癌の再発とたたかってきた。  
目前にちらつく死の影に面と向かい、これと、真向からとりくんで生  
きてきた。」その結果、岸本の心に、しだいに二つのがはつきり  
としてきた。その一つは、「人間には無ということは、考えられない」  
ということである。

その理由として次のように言う。

「人間が実際に経験して知っているのは、自分が生きて生活してい  
るということだけである。人間の意識経験がまったくなくなってい  
まった状態というものは、たとえ概念的には考ええても、実感とし  
ては考えられないことである。その考えられないことを人間は、死  
にむすびつけて、無理に考えようとする。そこで、恐ろしいことと  
なるのではないか。」

岸本は「生きている人間である自分が、死を考える場合には、この  
ように、死と、このわからないものとを結びつけるような角度から考  
えてはいけない。」ということに気づいたのである。

もう一つが死は「別れるとき」という考えである。

「死というのは、人間にとって、大きな、全体的な、「別れ」なの  
ではないか。そう考えたときに、私は、はじめて、死に対する考えか

たが、わかったような気がした。」と言う。岸本がここに至るのには、  
成瀬仁蔵氏との感動的な「出会い」があった。このことは特筆してお  
かねばならないだろう。

成瀬氏は日本女子大学の創設者で、大正八年に肝臓ガンでなくなっ  
たが、いよいよ死が近づいた時、担架で講堂まで運んでもらい、全学  
の学生を前にして最後の講演を行なった。その「告別講演」の日が記  
念日となって、毎年講演会が行なわれるのだが、昭和三十五年一月の  
記念日には岸本が氏を偲ぶための講演を依頼された。「癌で死んで行っ  
た人の心境について、癌を背負うて苦しんでいるものが」語ることに  
なったのである。

その講演準備のために成瀬氏の書いたものを読んでいる時、死につ  
いての考え方の「目がひらけた」と言っている。当日についても、「そ  
の日、私は講演をしながら、平生の自分とは違ったものがあるのを感じ  
た。心の底から何か激しい気魄のようなものが自分を突き上げて来  
るのを意識していた。」と書いている。

話を「別れるとき」に戻そう。「死への心の準備」との見出しをつ  
けた箇所と言う。

「・・・死んでゆく人間は、みんなに、すべてのものに、別れをつ  
げなければならぬ。それは、たしかに、ひどく、悲しいことに違  
いない。しかし、よく考えてみると、死にのぞんでの別れは、それ  
が、全面的であるということ以外、本来の性質は、時折、人間が、  
そうした状況におかれ、それに耐えてきたものと、まったく異なっ  
たものではない。・・・」

死も、そのつもりで心の準備をすれば、耐えられるのではないだ  
ろうか。ふつうの別れるときには、人間は、いろいろな準備をする。  
心の準備をしているから、別れの悲しみに耐えてゆかれる。もっと  
本格的な別れである死の場合に、かえって、人間は、あまり準備を

していいのではないか。それは、なるべく死なないもののように考えようとするからである。ふつうの別れでも、準備をしなければ耐えられないのに、まして死のような大きな別れは、準備しないで耐えられるわけではない。では、思いきって準備をしたらどうであろうか。

そのためには、今の生活は、また、明日も明後日もできるのだと考えずに、楽しんで芝居を見るときも、暮を打つときも、研究をするときも、仕事をするとときも、ことによると、今が最後かもしれないという心がまえを、始終もっているようにすることである。そして、それが、だんだん積み重ねられてくると心に準備ができてくるはずである。その心の準備が十分できれば、死がやってくるぶつりと、執着なく切れてゆくことができるのではないか。」

そして、このように「心の準備」ということに気づいてみると、「ずいぶん、心がおちついてきた。」「近寄りたたく、おそろしいもの」であった死が、「絶対的な他者」ではなく、「親しみやすいもの、それと出逢いうるもの」になってきたと言っているのである。

しかし、「死という別れ」と「ふつうの別れ」とは次の点で異なっている。ふつうの別れ、たとえば、親しかった人やその社会に別れて行くのは確かにつらいことだけれども、また、次の「行く手」がある。「行く手」のことを考えながら別れることができる。しかし死という別れの場合には、行く手つまり死後のことはわからない。「行く手のわからない別れ」、「どこへゆくかわからない船出」ということになる。ここに「深刻さ」があるのである。

果たして「心の準備」を十分に行なうならば、死に際しても「ぶつりと、執着なく切れてゆくことができる」ものかどうか、筆者にはよく理解しかねるところであるが、岸本はそのことをも含めて「心の準備」にかかっていると考えているのであろう。彼はこう続けている。

「この船出はどこへゆくかわからない船出である。自分の心を一杯にしているのは、いまいる人たちに別れを惜しむということであり、自分の生きてきた世界に、うしろ髪をひかれるからこそ、最後まで気が違わないで死んでゆくことができるのではないか、死とはそういう別れかただ。私は、こう考えるようになったのである。」

そして「別れるとき」を次のように結んでゆくのである。  
「この『別れるとき』のあることを思うと、自分の日々の生活に対する態度も、おのずから、身のひきしまるのをおぼえるのである。」

#### 四、「よく生きる」

死は実体ではなく、死とは実体である生命がなくなることである。この「発見」は岸本を、死は生命への「別れるとき」なる考えに導くと同時に、「生命の絶対的な肯定論者」にした。言い換えれば、「死後のことはしらず、この人間生活だけが生活なのだという立場」をとらせたのである。それは具体的にどう生きようとする 것인가。

「このような考え方がひらけてきた後の私は、人間にとって何よりも大切なことは、この与えられた人生を、どうよく生きるかということにあると考えるようになった。」

では、岸本は「よく生きる」とはいかに生きることと考えていたのか。「別れるとき」以後に書かれた「私の心の宗教」、「癌の再発とたたかいつつ」を中心に読んでゆくことにしよう。ちなみに、前者はNHKラジオ放送「人生読本」の中で話されたものである。

岸本にとって「死後の生命」という考え方は頼むに足りない。現実の世界における命だけが頼りである。この命は何にもまして尊い。何としても、この人間生活を幸福に生きて行かなければならない。では、幸福とはいったい何か。「生き甲斐」に裏打ちされたものこそ「本当

の幸福」であり、死の恐怖に対しても、それは強い抵抗を示してくる。

「私は、はじめは、それは、がむしゃらに、はげしく働くことだと思っておりました。がむしゃらにはたらいで、はたらいで、疲れきって、へとへとになるまで働く。」ことに「生き甲斐」を見出していった。しかし、後になってわかったが、そこには「一つの方向」、「一つの目的」が必要である。「生き甲斐」ということは、むしろ、一つの目標をもって、その目標に心を打ち込んで、一筋にすすんでゆくことの中にある。」ということに気がついた。「一つの目標」に向かって、「自分を打ち込む」ことができているかどうかにかかっているのである。では、その「目標」とは何であるのか。岸本は、それは「仕事」であると言う。「自分に課せられた仕事の使命をなすとげること」である。ここにいう「仕事」とは狭い意味での職業に限定されない。「仕事」は職業をも含むが、「めいめいの人間が、自分にあたえられているものは、これだ、と考えるような意味での仕事であります。」

そして次のような形で放送を締めくくっている。

「人間にとっては、きわめて身近にある自分の仕事の中に、意味を発見して、それに打ち込んでゆくことに、人生の本当の幸福がある、ということでもあります。死に直面しながら、死後の生命というものをたよりにしない私にとっての、人間の問題の解決の鍵は、このようなどころにあるのであります。これが、私の宗教であり、これが、私が、毎日、生きてゆこうとしている気持ちであります。」

死は「別れるとき」であるとの発見以前と以後とでは、この考え方に関してどのような違いが見られるのか。そのことについても触れておかねばなるまい。

発見の後、彼はこう回顧している。

「それまでの私は、正直にいうと、死から、一生懸命、目をそむけ

てきたといっている。死をみないようにして、そして、ただ、残されている生命の時間を、できるだけ有効に使うとしていた。現在の、目の前の仕事に打ち込んで、もっとも生き甲斐のある時間をつかうことで、死の恐怖、無の恐怖からのがれようとしていたのである。そのために、はげしく、はげしく生きてきた。」

以前も「目の前の仕事に打ち込んで、もっとも生き甲斐のある時間をつかう」ことを目標としており、彼の「幸福観」はほぼ一貫しているように見える。変化があったのは「仕事」に与えられる「意味」であろう。言い換えれば、「仕事」をする者の生きる姿勢における変化である。彼はこれまで「死の恐怖、無の恐怖からのがれようとして」「仕事に打ち込んで」きた。パスカル言うところの「気晴らし」を意識的に行なってきたのである。

「しかし、『別れるとき』という考えかたに目ざめてから、私は、死というものをそれから目をそらさないで、面と向かって眺めてみるものが多少できるようになった。」「以前は、死んだらどうなるかという恐怖をごまかすために、むしろ、がむしゃらに、働いてきた。しかし、今は、それほど、こわくない。もう少し、静かに人生をくらし、ゆく方が、ほんとうの人生ではないかと考えるようになった。」次男雄二氏によれば、岸本は晩年忙しい中、人に勧められて俳句の会に入り、「しば犬」なる号も持った。俳句の世界に遊ぶことができたのもこういう変化からであつたらう。

彼はついには次のように書くまでに至るのである。

「・・・私の癌は、私に、人生を深く見る目と、ほんとうによく生きる生き方を教えてくれた。私は、癌を恐れながら、しかし同時に、癌に感謝するような気持ちで日々を暮らしている。」

## 五、まとめ

『生活のなかの宗教』の中で、宮家準は岸本の『死を見つめる心』に触れ、「ここで興味をひくことは、実体があるのは唯この世の生だけだと強く確信していた合理主義者の彼が、死の怖れがもたらした信念のぐらつきななかで、宇宙の霊に帰って休息するという独自の世界観を案出していることである。このことは死に直面した人間にとって他界の存在を信じるのがいかに大きな安らぎを与えるかということを示しているとも思えるのである。」と述べている。

確かに岸本は「私の心の宗教」の中でも、「私にとっては、私の個人の生命力というものは、私の死後は、大きな宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまつてゆくと考えるぐらいが、せい一杯であります。」と書いているが、その後すぐに「それは、いいかえれば、私という個人は、死とともになくなる、ということでありませう。」(傍点筆者)と付け加えている。彼にとって、死とは、「この、今、意識している自分」が消滅することを意味している。この「他界観」が晩年の岸本に大きな影響をもつたとは言いがたい。「他界の存在を信じ」、そのことで「大きな安らぎ」を覚えたとは認め難いのである。

中村真一郎は自ら編集した『死を考える』の中で、岸本の「わが生死観」を取り上げ、次のように紹介している。

「これは現代のすぐれた宗教学者が、自己の確実な近い死を知り、その恐怖を通して、ひとつの悟りに到達するまでの、素直で明快な記録である。これは自己の精神を素材とした、悲壮な実験ともいへべきで、今日の私たちにとって、最も切実な証言である。熟読を希望する。」<sup>66)</sup>

中村のこの意見には筆者もおおむね賛成できる。ここに言う「ひとつの悟り」とは、先の「独自の他界観の案出」ではなく、死は「別れ

のとき」との、身をもって獲得した認識をさしていよう。中村も言うように、岸本の試みは「自己の精神を素材とした」「実験」であり、しかもその「素直で明快な記録」ないしは報告である。「実験」的な側面は例えば次の箇所からもうかがわれる。

「人間にとって何よりおそろしいのは、死後の世界があるか、ないかということより、あるかないかわからないままに、生命欲に圧倒され、無理に、あると自分にいきかせて、なぐさめようとする、しかし、どうしても疑いがおこつてきて、煩悶するようになることではないか。それが、いちばん悲惨ではないか。こう考えて、私は、どちらかにきめてしまえば覚悟がつくかもしれないと思った。そして、ひとつ、悪い方にきめてしまおうということで、死後の世界はないのだと心にきめた。あてにならぬことはあてにしない、ときめたのである。」(傍点筆者)

パスカルの「賭の断章」を彷彿させる。岸本はここでパスカルが勧めたのとは逆のものを選ぶとするのである。彼は言わば「死後の世界なし」の方に「賭け」るのである。

「死後の世界あり」に賭けられるならば、生命飢餓感もやわらげられようが、そのような誘惑に対しては、「私の心の中にある知性は、私にすぐよくよびかけてきた。そんな妥協でお前は納得するのか。それは、苦しさを負けた妥協にすぎないではないか。その証拠に、お前の心自身が、実はそういう考え方に納得してはいないではないか。」<sup>67)</sup>

そういう「するどい心底の声」を聞いたと言う。しかも、同時に彼は「自分の知性の強靱さに心ひそかな誇りを感じ」たとも言う。信仰を持つ者からは傲慢のそしりを受けかねないが、それが彼の方法であった。彼の方法とは「素手で死の前にた」つ。そして「自己の精神」、自身の「心底の声」にあたうかぎり忠実であろうとすることであった。

彼の心は死の前で既成の観念によるいかなる武装もしなかったのだ



る。結論に至るまでのこの姿勢は、もちろん誰にでも要求されるべきものではない。学者であればこそあくまで貫こうとしたその生き方、学問に対するその姿勢に筆者は畏敬の念を覚えるのである。

彼は自らの精神と肉体を通して、「死後の生命」、「死後の世界」の存在を信じていることが、自分もその一人である現代人に、可能なかどうかをあくまで探究した。信じていることができないなら、宗教学の学者として、現代にどのような宗教が可能なのかを、一身を賭して思索しようとしたと言っている。『死を見つめる心』は哲学者としての使命感、学問に対する飽くなき情熱の賜物に他なるまい。

中村は先の編著の中で、岸本の「わが生死観」を絶賛してはいるが、死に対する態度では岸本と一致していない。筆者もまた岸本の結論には同調したいものがある。しかし岸本のその生き方、生きる姿勢、小林秀雄の言葉を借りれば、「果てまで歩いて来た」ことに対して畏敬の念を禁じ得ないのである。信仰を持つ者であれ、持たない者であれ、それが「果てまで歩いて来た」上での決断なのか。充分に歩むことなく行なわれた決断であるのかどうか。本書は、信仰を目標とするにしても、しないにしても、読む者に徹底した自己吟味、自己点検を要求する。われわれの生き方に今日なお最も厳しい姿勢を求める、まことに倫理的な書物である。

## 注

- (1) 池辺義教著、『医の哲学』（行路社、一九八六年）、九四頁  
 (2) 岸本英夫著、講談社文庫『死を見つめる心』ガンとたたかった十年間―（昭和四八年）  
 (3) 中村真一郎編、『死を考える』（筑摩書房、一九八八年）  
 (4) 中沢正夫著、『「死」の育て方』（情報センター出版局、一九九一年）、二二三頁～二三四頁
- (5) 『死を見つめる心』、五頁  
 (6) 同書、一一頁  
 (7) 同書、一一頁  
 (8) 同書、一一頁  
 (9) 同書、一一頁～一二頁  
 (10) 同書、一三頁  
 (11) 同書、一五頁  
 (12) 同書、一七頁  
 (13) 同書、一七頁  
 (14) 同書、一七頁～一八頁  
 (15) 同書、二七頁  
 (16) 同書、一八頁  
 (17) 同書、一九頁  
 (18) 同書、一九頁  
 (19) 同書、四頁  
 (20) 同書、九四頁  
 (21) 同書、六五頁  
 (22) 同書、二二頁  
 (23) 同書、二二頁  
 (24) 同書、二三頁  
 (25) 同書、二七頁～二八頁  
 (26) 同書、二四頁  
 (27) 同書、二八頁  
 (28) 同書、二八頁  
 (29) 同書、二八頁  
 (30) 同書、三〇頁  
 (31) 同書、八七頁

- (32) 同書、八七頁  
(33) 同書、三〇頁〜三一頁  
(34) 同書、三二頁  
(35) 同書、三二頁〜三三頁  
(36) 同書、三四頁  
(37) 同書、三二頁  
(38) 同書、二二頁  
(39) 同書、四一頁  
(40) 同書、四二頁  
(41) 同書、四四頁  
(42) 同書、四四頁  
(43) 同書、四七頁  
(44) 同書、三三頁  
(45) 同書、三三頁  
(46) 同書、三四頁  
(47) 同書、九一頁  
(48) 宮家雄著、『生活のなかの宗教』(NHKブックス、昭和五五年)、  
一七頁  
(49) 『死を見つめる心』、二八頁〜二九頁  
(50) 『死を考える』、一九九頁  
(51) 同書、二八〜二九頁  
(52) 同書、二〇頁  
(53) 同書、二〇頁

## La lutte d' Hideo KISHIMOTO

Isao OMACHI

## Résumé

Hideo KISHIMOTO (1903-1964), qui était professeur de la science des religions à l' université de Tokyo, a appris qu' il avait un cancer par un médecin américain quand il était aux États-Unis comme professeur honoraire. C' était celui de la peau (mélanome), qui est dangereux et très progressif. Il lui a été notifié qu' il avait encore pour six mois à vivre seulement.

Heureusement il a survécu dix ans. Juste après sa mort, un livre 《Le cœur qui regarde fixement la mort—dix ans où j' ai lutté contre le cancer—》 a été publié en rassemblant des essais qu' il avait écrits pendant dix ans où il avait lutté contre la maladie en proie à la peur de mourir.

C' était un document clair et sincère qu' avait écrit le professeur, qui savait que' il mourrait bientôt certainement et qui ne croyait pas en l' autre monde, jusqu' à ce qu' il soit arrivé à la vérité.

Maintenant la mort devient de moins en moins un sujet tabou. On publie beaucoup de livres sur la mort. On peut souvent y trouver le nom de KISHIMOTO. Dans ce domaine son livre est déjà très connu au Japon. En étudiant principalement les essais 《Ma conception de la vie et de la mort》 et 《Le temps de se séparer 》, j' examinerai comment ce livre doit être apprécié si grandement.